

森信三先生の生涯



人生二度なし

不冬

森信三先生は

- ◆ 国民教育者の師父と仰がれ、全国各地を講演行脚されました。
- ◆ 「全一学」(人生を生きる真の力となる学問)を提唱されました。
- ◆ 「人生二度なし」を根幹とする「人間学」を実践指導されました。

森信三先生の語録より

- ・「人生二度なし」これ人生における最大最深の真理なり
- ・時を守り 場を清め 礼を正す。これ再建の三大原則なり
- ・逆境は神の恩寵的試練なり
- ・一眼は遠く歴史の彼方^{かなた}へ他の一眼は脚下の実践へ
- ・教育とは流水に文字を書くような果かない業である
だがそれを巖壁^{がんぺき}に刻むような真剣さで取り組まねばならぬ
- ・人間は一生のうち逢うべき人には必ず逢える
しかも一瞬早過ぎず一瞬遅すぎない時に

森信三先生の生涯



岩滑尋常小学校在学中



養父母(種吉・はる)

岩滑時代

森信三先生は、第一回官選国会議員・愛知県会議長を歴任した愛知県半田市の名士、端山忠左衛門を祖父とし、武豊町で商店を営む父俊太郎・母はつの三男として、明治二十九年九月二十三日生まれました。

二歳の時、両親の不和により、岩滑の小作農家森家に養子に出されました。端山家とは縁もゆかりもありませんでした。先生を襲った人生第一の試練でした。

しかし、養父母森種吉・はるは、非常に律義、実直かつ勤勉で、隣近所の人たちに「ほんとうの子だつてあんなに大事には出来ない」と云われるほど、信三少年をかわいがりました。

毎年秋の暮れになると、小作米を俵につめて荷車に積み、地主の家へ納めに出かける種吉の後姿が、幼い信三少年の眼底に深く焼き付けられました。社会の底辺に生きる庶民の質朴さと哀歓を味わわれたことが、生涯を貫く先生の基調音となりました。



愛知師範学校在学中



愛知師範学校在学中

岩滑尋常小学校への入学は、明治三十六年でした。「信三さんになかう者なし」という評判は、高等科へ進んでからも変わりませんでした。高等科では、伯父・日比格が校長であり、親代わりのように見守ってくれました。しかしよい卒業の年、その日比校長から「おまえの家は中学へ行けるような家ではないから師範学校へ行き、学校の先生になるほかない」と言われた時は、人生のきびしさと挫折感を味わいました。

今まで肩を並べて成績を争っていた友人たちはみな中学校へ進学し、信三少年はただ一人取り残されました。先生を襲った**第二の試練**です。師範学校へ入るには年齢が足りないので、母校で一年間給仕をすることになりました。昨日までは全校生の前で号令をかけていた信三少年は、当時の小使いさんの下で働くことになりました。しかし、校長室の一隅に席を置き、来客接待、校長秘書のような仕事をしながら、礼儀作法などを学ぶことができました。ここで岡田式静坐法の創始者岡田虎二郎先生の偉容に接したことは、後年の「腰骨を立てる教育」の提唱へと発展していったのです。



京都大学大学院時代(先生前列左端)



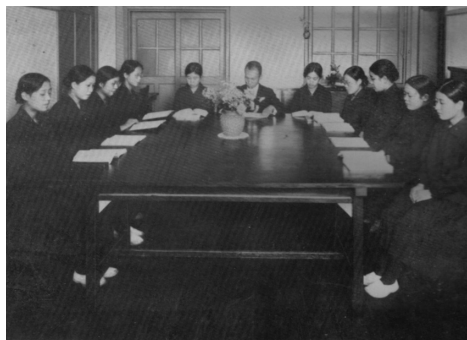
広島高等師範学校時代(先生左端)

故郷を出る

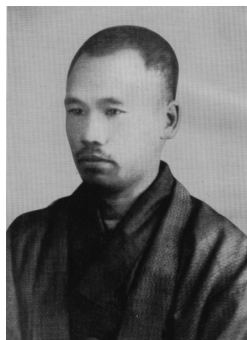
名古屋第一師範学校(愛知師範)を首席で卒業した信三先生は、三河の幡豆郡吉良町の横須賀尋常高等小学校へ赴任しました。その頃、刊行された三浦修吾著『学校教師論』を宿直室で読みふけり、さらなる向学心をかき立てられました。

横須賀小学校勤務一年半後の大正七年、先生の才能を惜しむ友人たちの勧めと親戚・近隣の援助により、故郷を離れ、広島高等師範(広島高師)に進学することになりました。篤志家サントリーの創業者鳥井信治郎氏の支援を受け、広島高師を卒業。さらに四日市の実業家小菅剣之助氏から学資援助に受け、京都帝国大学哲学科へと修学の道を歩み続けました。両校では、当時日本を代表する思想家、西晋一郎、西田幾多郎の二人の恩師から、倫理学と哲学を学びました。

幻の師・新井奥邃先生あらいおうすいの著書に接して、隠者に憧憬を深め、さらに幾人かの在野の思想家たちと膝を接する機会を得て、先生は晩年の「全一学」ぜんいつの提唱に発展する学問の基礎を築くことができました。



天王寺女子師範学校での授業（先生中央）



天王寺師範時代（昭和8年頃）

『修身教授録』の発刊

京都大学哲学科を首席で卒業しながら、学問の都京都みやこを離れ、

大阪の天王寺師範学校（天王寺師範）の一教諭として勤めることになりました。ここで学問の体系化に没頭し、名著『恩の形而上学』『学問方法論』を執筆しました。

二宮尊徳翁の『二宮翁夜話』『報徳記』に出会い、「真理は現実の唯中にあり」、「人生二度なし」の根本信条に開眼されたのもこの時期でした。

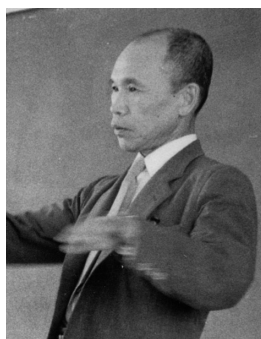
天王寺師範の倫理の授業では、人生の切実かつ身近なテーマを掲げて講義し、生徒に筆記させた講義録『修身教授録』は、当時国語界の巨人・芦田恵之助先生えのすけの目にとまり、氏により刊行され、全国教育界に喧伝される名著ベストセラーとなり、現在に至っております。

大阪生活十三年の後、恩師西晋一郎先生の推挙で、満州の建国大学創立で教授として赴任。倫理・哲学の教授、また塾頭として、学生たちに慕われました。

やがて敗戦の混乱の中、新京を脱出して、奉天へ行き、零下三十度の廃屋で凍餓死寸前となり、九死に一生を得て帰国されたのは、生涯最大の試練でした。



小学校での教育講演会



神戸大学時代(昭和30年頃)

帰国して

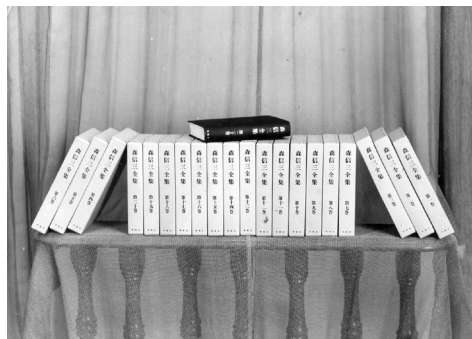
「学者にあらず、宗教家にあらず、また教育者にあらず。宿縁に導かれて、国民教育者の友として、この世の生を終えん」という決意のもと、全国各地の学校と縁ある人々を訪ね、講演会、読書会や座談会に出席して啓蒙運動に専念されました。

昭和二十二年、月刊誌「開頭^{かいたん}」を発行し、のち「実践人」と改題して現在に至っております。

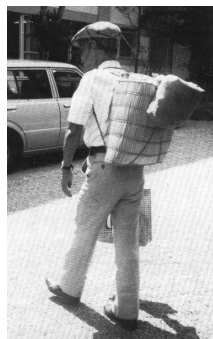
しかし、雑誌「少年科学」の発行により、開頭社は破綻して、多額の負債を負うことになります。

昭和二十八年(五十六歳)、神戸大学教育学部教授に迎えられる、多くの学生に感化影響を及ぼしました。大衆在職中は、教育哲学並びに教育実践の講義と、『生を教育に求めて』叢書をはじめとする多数の著書を執筆し、今でも国民教育者の必読の書と仰がれています。

在職中の逸話も多く、出勤すると、教官室と教室の間の廊下のゴミを、在職七年間拾い続けられたとか、昼休みには校庭の芝生の上で学生たちと座談会をしたことなど、よく話題にのぼる話です。



全集



教育行脚中の先生

「実践人の家」の創設

昭和三十五年(六十三歳)、神戸大学定年退職後の五年間、全国講演行脚と執筆活動に打ち込み、まさに凄絶を極めた感がありました。(その例として、講演旅行千回の悲願を一年半にて遂行)

昭和四十年、神戸海星女子学院大学教授とし迎えられ、授業を担当されながら、月刊誌の発行、毎年夏の研修会の開催、著述、講演行脚、各地読書会の指導と東奔西走の活動をつづけられました。

そして、先生は戦前戦後の著書に加え、新たに『哲学五部作』等を加え、昭和三十九年、『森信三全集』二十五巻の出版という大事業に全生命をかけました。

昭和四十七年、妻そして長男の逝去が続いたのを機に、先生は尼崎市・立花地区に居を移されました。

すると、全国の同志から声が挙がり、多数の人々からの浄財寄金により「家」の建設が始まりました。昭和五十年完成。「実践人の家」は、同志の集う場所となり、事業の拠点となりました。(翌五十一年、社団法人認可、平成二十一年法改正により一般社団法人認可)



「実践人の家」の森信三先生



森信三全集 続編



竣工当時の実践人の家(昭和51年)

現在は「実践人の家」の本部として、創設者森信三先生の遺志を受継ぎ、様々な活動を展開しております。

先生はここで独居自炊、玄米菜食生活を実践される。

一人雑誌、複写はがきの使用、立腰教育、生涯三冊

の本刊行などを幅広く推奨され、同志発行本の序文執筆は一九三篇に及んだ。同時に、先生は全国の真人の発掘とその著書の刊行と普及に尽力されました。

そして、全一学の集大成として『全一学五部作』などの執筆を続け、これらをまとめて、昭和五十七年(八十五歳)『森信三全集続編八巻』として刊行されました。

晩年は、脳血栓による不自由な手でハガキの返事を書き、来訪する同志に指導を与えながら、平成四年十一月二十一日、九十六歳の生涯を閉じられました。

先生の一生は、民族の将来に思いを馳せ、縁ある人々のために精魂を尽くされた生涯でした。それは「人生二度なし」の根本信条と、腰骨を立て続けるという身心相即道により、いのちの自分を完遂せられたと言うほかありません。まさに国民教育者の師父であり、「人間の生き方」の導師の名にふさわしい生涯でした。

森信三先生略歴

明治二九年 ○才 愛知県知多郡武豊町生まれ 第一回国会議員の端山忠左衛門の孫 男三人兄

(一八九六) 弟の末っ子。二才より小作農森種吉の養子となる(半田市岩滑)。

明治三六年 六 岩滑尋常小学校入学

明治四〇年 一〇 半田小学校高等科入学

明治四一年 一一 元旦に実家の祖父端山忠左衛門より頼山陽の「立志の詩」を教えられる。

明治四四年 一四 高等小学校を卒業後、母校の給仕として小学校で働き、岡田虎二郎氏の腰骨

を立て通すことを学ぶ。下座業も学ぶ。

大正元年 一五 代用教員として働く。

(一九一一) 名古屋第一師範入学寄宿舎生活をする。(四年)

大正五年 一九 横須賀尋常小学校勤務。

大正八年 二二 広島高等師範英語科入学、三年(福島政雄、西晋一郎両先生に師事)。

大正一一年 二五 旧阿倍野高等女学校に英語教師として勤務。

大正二二年 二六 京都大学哲学科入学、三年(西田幾多郎先生に師事)

(一九二四) 沢木興道和尚、福田夫妻、伊藤証信、宮崎童安、高田集蔵氏ら野の思想家と交流

昭和元年 二九 (松本)文子と結婚。京都北白川に住む。天王寺師範、女子師範に勤めながら

京都大学大学院へ進学 大阪生活一三年始まる。

昭和三年 三一 「二宮翁夜話」、「報徳記」より「真理は現実のただ中にあり」「人生二度なし」、

との学問的開眼を得る。

伊藤証信氏より「知愚一如」を学ぶ。

昭和五年 三三 大学院五年課程を終了、大阪北田辺に住む。

昭和六年 三四 天王寺師範の専任教諭となる。

(一九三一) 新井奥邃著「奥邃広録」を見出す。

昭和七年 三五 国民精神研究所(文部省)に派遣。

昭和一〇年 三八 「忠孝の論理」刊行。「恩の形而上学」執筆

昭和一二年 四〇 「修身教授録」五卷(授業記録)を芦田恵之助氏推奨により刊行

「学問の方法論」刊行

昭和一四年 四二 建国大学へ勤務。七年

昭和二〇年 四八 シベリア送りとなるべきところ、元生徒に救われる。奉天で大道易者二ヶ月。

昭和二一年 四九 引き揚げ。甲子園へ。教え子来訪。作歌と思案。

戦後民族に科せられた巨大な変革の様相とその意義を知ることにより全力を集中。

請われるままに講演をして回り、敗戦国民の悲哀を痛感。敗戦の日本民族を

立ち直らせるには家庭教育しかない、と考え、その重要性を説く。

昭和二二年 五〇 講演、月刊誌「開顕」発刊

昭和二三年 五一 月刊誌「親と子」発刊。月刊科学誌「子供の科学」(明和印刷)の普及頒布に協力

「国と共に歩むもの」五巻・歌集「国あらたまる」刊行

昭和二四年 五二 開顕社より作田莊一著「時代の人河上肇」、芦田恵之助著「恵雨自伝」を刊行

昭和二六年 五四 「少年科学」を発行、開顕社は破綻し、家屋敷を売却して返済に充てる。

昭和二十七年 五五

兵庫県立篠山農大に英語科講師として勤務
執筆活動、講演行脚に従事する。

昭和二十八年 五六

第一回研修会、夏安居(げあんご)を京都府胡麻郷小学校で開催

昭和三十一年 五九

神戸大学教育学部教授 紙くず拾い、「自分の学問と旅とを、舐をかけて切り結ばせてみたい。」執筆活動、講演行脚

月刊誌「実践人」発刊
講義、ハガキの返事、全国教育行脚、著述を行う

昭和三十五年 六三

神戸大学退職。
夏、冬の研修会、全国教育行脚(二五〇日/年)は続く。

昭和三十七年 六五

車中飲食の禁。名所旧跡の見物の禁。古本屋をのぞくのが楽しみ

昭和三十九年 六七

教育講演一〇〇〇回に。「立腰教育」の緊要なことを発表

「実践人創刊一〇〇号」に「森信三全集」刊行を公表する。

昭和四〇年 六八

坂村真民氏が「天の声地の声」として推奨下さる。
海星女子学院大学四年制開始に当たって、(野尻武敏氏)の推薦で教授就任

昭和四二年 七〇

上村秀男氏を介して元兵庫県知事阪本勝氏と話し合う。森信三先生を生涯の師と仰ぐと著述される。

昭和四三年 七一

「森信三選集」の刊行

全集二五巻の編集を完了 教育行脚開始

森信三先生の創意提唱に、一人雑誌、複写ハガキ使用、立腰教育、生涯三冊の著書刊行の奨めがある。又、「奉仕」として返事を出す、同志の著述の相談

昭和四五年 七三

に応じ、普及に力を入れ、紙くずを拾う。

隠岐の島での夏季研修会は永海佐一郎博士の話が中心となった。

博士の信念は「人間の価値」天職への熱心度×心のきれいだ度であった。

我が国は極度の退廃現象の風潮が蔓延まんえんしている。「腰骨を立てる教育」しかない。

「しつけの三原則は、朝必ず挨拶する、「はい」と返事をする、はき物をそろえ、いすを入れる」が家庭でしつけられねばならないと堤唱した。

文子夫人逝去

昭和四六年 七四

「森信三著作集」刊行

昭和四七年 七五

長男惟彦逝去 実践社の解散

一月、尼崎市西立花町の廃屋で独居自炊生活をはじめた。

玄米自然食、挨拶、紙くず拾いを務めとする。

遠来の客も増える。みそ汁会、とろろ汁会を開催した。

昭和四九年 七七

「幻の講話」(五巻)刊行。全国同志の献金により、「実践人の家」建設が始まる。

「日本人と思想」山縣三千雄(早稲田大学教授)著で、明治・大正・昭和の代表的思想家九人に森信三先生を入れられる。

昭和五〇年 七八

「実践人の家」落成

衣服革命でヤング向きにファッション衣料に変身する。

昭和五一年 七九

「実践人の家」が社団法人として認可が下りる。

「全一学五部作」の執筆を始める。

立腰教育の福岡市仁愛保育園(石橋富知子氏)を田辺聖恵氏と訪問、指導。

昭和五六年 八四 脳血栓で塚口病院入院。

昭和五七年 八五 海星女子学院大学を退職。「実践人の家」で独居自炊を続ける。

「森信三全集 続編八巻」の刊行を発表する。

昭和五八年 八六 脳血栓で海星病院入院後、三男迪彦宅（神戸市灘区）へ移転する。

実践人の冬期研修会は地域別小グループによる全国的研修会となる。

昭和五九年 八七 「森信三全集 続編八巻」の完成。療養中来客が絶えない。

平成元年 九二 「修身教授録」再刊（致知出版）

十一月二一日逝去。

平成四年 九六 三回忌 半田市名誉市民に推挙される。

半田市が新美南吉記念館開設に伴い、その一室を森信三記念室完成。

平成六年 森信三先生生誕百年記念・実践人夏季研修会開催（於 半田市）

平成七年 森信三先生生誕百十年記念・実践人夏季研修会開催（於 尼崎市）

平成一七年 「第二一回ベストロッチ教育賞」受賞（広島大学）

平成二四年 「森信三全集続巻（新編）」八巻再刊（致知出版）

半田市新美南吉記念館 森信三記念室が半田市立博物館へ移設。

平成二六年 「実践人の家」を改造・整備して、森信三資料館「全一庵」完成。

平成二七年 森信三先生生誕百二十年・実践人創立四十周年記念全国研修大会開催（於 尼崎市）

平成二九年 全国研修大会開催（於 尼崎市）通算九二回

講師（青山俊重・小野晋也・大森松司・芳村思風・行徳哲男先生）

機関誌「実践人」発行 通算七九九号 （年齢は四月時点の満年齢）

●森信三先生の教え

• 再建の三大原理

1. 時を守り
2. 場を清め
3. 礼を正す

• しつけの三原則

1. 朝のあいさつをする子に
2. 「ハイ」とはっきり返事のできる子に
3. 席を立ったら必ずイスを入れ
ハキモノを脱いだら必ずそろえる子に

• 腰骨を立てる(身心相即の原理)

- ・性根の入った子にするには、「腰骨を立てる」

発行

一般社団法人 実践人の家

〒660-0054 尼崎市西立花町2丁目19-8

TEL 06-6419-2464 FAX 06-6419-3866

森信三先生の生涯 令和5年6月発行